

先月、「IPAくまもと」と「日本冒険遊び場づくり協会」の共催により、「～東北から熊本へ～ あそびの力」というシンポジウムを開催しました。

東日本大震災の直後から、東北でプレーカーを走らせ、遊びを通して子どもたちの心の傷を癒してきた東北のプレーカー須永 力(すなが つとむ)さん、日本初の職業プレイリーダー天野 秀昭(あまの ひであき)さんをお迎えしてのシンポジウム、そして、翌日には、そのお二人を囲んで、メンバーによる学習会も開催しました。私たちIPAくまもとのメンバーも、非常に良い刺激を受け、これからの活動に役立つお話もたくさん聞くことができました。

それらのお話の中から少しご紹介させていただきます。

「教育と遊育」について

「教育」は、教える、育てる。つまり、主体は大人。その人にとって価値のあることしか教えない。決めるのはすべてその大人。価値観の押し付けになりかねない。

それに対し、「遊育」は、遊ぶ、育つ。つまり、主体は子ども。その子にとって意味のある、価値のあることをする。好き・嫌いに、上手・下手は関係ない。楽しみは一人ひとり違う。やりたいことも違うはず。その子の持っている気質や特性は、その子の世界そのものであり、遊びを通して、子どもは自分の世界をつくっていく。

よく、大人は木に登ろうとする子どもに対して、「あぶないからやめなさい」「まだ登れないでしょ！」と止めようとしてしまう。子どもは「登ったことが無いからこそ、登りたい」のである。

このように、大人は子どもの遊びを奪いがち。「安全のため」という名目で、子どもから想像力や判断力を奪ってしまうのである。そもそも脳の中でも「善・悪(正・誤)」「(価値観)を判断する場所と「快・不快」(情動)を感じる場所は違う。つい、大人は「正しい遊び方をしなさい」(滑り台は一方通行！など…)などと、使い方を大人が決めて、それを子どもに押し付けてしまう。これは、大人の価値観の押し付け。こうしたことが多すぎるため、現代の子どもたちは自分たちで考えられない、決められない場面が多く、自分の世界を作れないまま大人になってしまう。だから自分が生きている実感が得られない子が多い。一昔前は、「何をしたらいいかわからない」という若者が話題に上っていたが、今は、「何もしたくない」という若者が増えている。それは、小さい時から、「やりたいことをやってこなかったから」ではないか。

ケガについて

☆ケガはできることなら避けたい。

☆子どもがケガをするのは、大人にとっても辛いことである。

これらは大前提！そのうえで…

子どもは自ら成長したい！と願っている。自分の世界を拡げ、深めたいという本能的な欲求がある。だからこそ、限界に挑もうとする。しかし、それは危険と隣り合わせでもある。

私たち大人は、子どもが挑戦しようとする姿を止めたくない、大事にしてあげたいと考えている。だから、場合によってはケガをしてしまうこともある。ある程度はやむを得ないこととして大人も覚悟が必要。

ケガはマイナス面ばかりではない。その時は痛い思いをしてしまうが、次は挑戦するときは慎重になる。もっとうまくやろうとする。それは、確実に自分の身を護る力につながっていく。

「遊ばないと心が死んでしまう」というお話もされていました。阪神淡路大震災のあとも、被害日本大震災の後も、そして、熊本地震の後も、遊ぶことによって、子どもも大人も心の傷を癒してきたといっても過言ではありません。子どもの健全な育ち、子どもだけでなく、大人にとっても、「遊びは、余暇で楽しむ以上に、必要不可欠なものである」という認識をもっともっと一般的なものにしていかなければならない、そして、保育園は子どもを預かる場としてだけでなく、「子どもが育つ場」として、子どもの豊かな育ちを保障する場としての環境づくりを進めていかなければならないと強く実感しました。